
ストーリーカーと雨音。

烏龍茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストーリーカーと雨音。

【Nコード】

N00060

【作者名】

烏龍茶

【あらすじ】

『君は本当に詰らない人間だね。』

「キミは本当につまらない人間だね。」

冷たい言葉。

それは、世界ノ狂気で在る処の、僕へと向けられた凶器でしかない。

「つまらない、、とは？ それは、どういう意味ですか？ カオリさん。」

この人相手に、こんな中途半端な反発をしたところで、僕が受ける精神的ダメージ量が無意味に加算されるだけなのは百の承知である。それでも、唐突にこんな暴言を吐かれて、唯、じっと黙っているほど、僕は緩慢でもない。

それに、僕にはそうそう、ありつけられるモノではないであろう、カオリさんとの貴重な会話イベントである。こんな、チャンスを見逃すわけにはいかなかった。

「そのままの意味よ。」 冷たい口調でカオリさんは僕の質疑にそう応える。

それから、しばらくの間を置き、カオリさんこと【雨音 香】は、わざとらしく溜め息を吐いて、目を閉じる。そして、細浏眼鏡ノレズ越しにミツメテいた手元の英単語帳を閉じ、膝の上に置き、白イ両ノ手ノ指ヲ、其の上に添える。

それから、ゆっくりりと、実にゆっくりりという感じに彼女は、凜と整った自身の顔を、僕へと向け、クチヲヒラク。

「キミは、、、キミには、スキナモノはあるノ?」

うーん、と唸ってみた。僕は腕を組み、横目でカオリさんの顔を伺いつつ言ってみる。

「好きな人ならいますよ?」

「私はモノじゃないわ。」

、、、アナタトハ、マダ、イッテイナイデシヨウ?

「そうじゃなくて、趣味とか、そういうモノよ。」

「、、、そうですねえ。」

腕ヲ組み直ス僕。

「音楽ですかね。大好きですよ、音楽。」

ふうん、と、言つて、一応。という感じに小さく一度頷き、そして、膝ノ上の英単語帳を手に取る。

開き直し、目線をそちらへと、、、基在った場所へと戻した。そして、まるで、作業中に子供の相手をする母親の様に、タダ淡々と、単ナル独り言ノ様ニ。カオリさんは実に、実に淡々という感じに、言ノ葉ヲ吐キ出ス。

「ほんつとに、キミはツマラナイオトコね。全く面白味というモノを感じられないわ、実に、誠に、どこまでもツマラナイ。

キミの様な【ドウシヨウモナクツマラナイニンゲン】までもが、

そんな、在りに在り溢れた、大層御立派な御趣味を御持ちになつて
いるだなんて、、、。

まあ、お陰様で？近年も音楽業界だなんて、無意味、無価値、不
確かな、詐欺師集団団体みたいな商売組織が太々しく、我が物顔で、
何を勘違いしてか、大衆を目前に偉そうに、実に偉そうな様子で、
当たり前のように、それが恰も自然体なのだ、とても言うかのよう
に、みつともなく寝転がり、居座り続けていられるわけだけど？

、、、ねえ、キミの様なツマラナサが内から滲み出てしまつて
いる様な人間はもっと、特殊位な趣味を持つていても罰は当たらな
いと思うんだけど、、、ああ、ゴメンナサイ。もお、持つてたつけ、
私へのストーキング行為とか、下着ド、、、」

「すとおおぷッ。」

周りを見渡す。ああ、人いないんだつた。

「どうしたの？ああ、そうね、ホントに楽しいことは人には知ら
れたくないものだものね。独占したいのよね？私のストーキング事
業。」

「あのですねえ、、、」

気付いていたのか。イヤハヤ、流石である。

僕が自分のストーカーとわかつていて尚、隣に座っているとこ
ろも含めて流石である。まあ、座席を移動したところで、それは解決
にはならないのだが。ストーカーがそんなことで身を引いてくれる
なら警察は要らない。

むろん、彼女が自主的に僕の隣に座ってくれるはずもなく、、、。

、、、冗談はこの辺にして。

「カオリさんは、CDとか買ったことないんですか？」

「そうね。」

「音楽嫌いなんですか？」

「嫌いな。」

「なんで、、、ですか。」

「キミと同じで、うるさいから。」

ストーカーであるところの僕が、ターゲットである処のカオリさん本人にそう言って貰えるだなんて、、、いやはや、なんとも光栄な話である。

そりゃまあ、一方的に僕みたいな訳の判らない男に延々と、しつこく話しかけられていれば、文字通り『五月蠅い』とも感じるのだらう。

鬱陶しさの極みである。キモイ。いや、怖い。

、、、冗談はこの辺にして。

「じゃあ、カオリさん」

話題を変えよう。

「そう言うカオリさんは何か御趣味はあるんですか？」

「無いけど。」

「、、、、、、」

、、、無えのかよ。

人の趣味を散々「普通」とか馬鹿にしておいて、自分は「無い」の一言で片付けようというのかというのか？この人は。
流石だ、流石カオリさんだぜ。

「無いんですか？」

確認。

「無いわね。」

・・・了解。

、、、溜息。

「べつにね、キミのツマラナサを幾ら批判した処で、キミがドウシヨウモナクツマラナイという、紛レモナイ事実ヲ指摘シテアゲタ処デ、私がソウデハナイとは、私が人一億倍に超絶的ニ面白イニンゲンだなんて事を言ったことには、イチミリタリトモナラナイヨ。」

相モ変ワラズ、英単語帳から目線を逸らすこともなく、淡々と、、、ただ、淡々と、、、。

「言葉なんて、、、発シタ時点デ偽物ヨネ。雨音ト一緒ナノヨ。音元ハ冷タクテ、冷タクテ。」

皆ソレニ触レタクナクテ、其ノ音ダケヲ聴イテイタガルノヨネ。」
溜息。

「矛盾を気にするくらいなら、本質を見極めなさいって話よ。」

再度、溜息。

恐らく、ただの愚痴。

「一緒よ、私もキミと一緒にツマラナイ人間なのよ。」

そういうと、カオリさんは立ち上がった。

英単語帳を革鞆にしまい、座席横の手摺りに掛けていたビニール傘を手に取る。

停車。

「じゃあね。」

運転手に定期券を見せ、カオリさんはバスから降りて行った。

沈黙。。。静寂。。。

「、、、ああ、しまったなあ、、、。まあ、今日はいいか、、、。

」
雫と霽のかかった窓から、ビニール傘と革鞆が遠ざかるのを見送った。

ヒトリボツチノオイテケボリ。

開いたままの出口から、【ピチャ、ピチャ】と雨音が静かに響いた。どうしようもない、虚無感。

溜息。

「ちねびや。」

そのつぶやきは雨音にかき消されるほど、小さいものであった。

(後書き)

ここまで読んでいただいた方、誠にありがとうございます。 O R Z

過去モノです。

当時にもの凄く好きだった(今でも好きですが)有る作家さんの
影響がバリバリ入っているのが見受けられます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0006o/>

ストーカーと雨音。

2010年10月9日10時37分発行